

* 登場人物

フウ（風鶴）（17）東京からきた少年
吉野宏三（60）元教師
吉野佐知（57）宏三の妻
保田正治（65）漁師
保田聡子（63）正治の妻
保田元治（40）正治の息子・漁師
女1・2、女子高生1・2、吉野の友人

※ この物語の舞台は三石町ですが、敢えて町名は特定していません。

悲しみは風の彼方に
　　風に乗った少年

三浦 まどか

フウム「僕は飛ぶ——」

SE 強風が吹いている。
風の向こうに荒波の音がする。

フウム「あの風に乗って飛ぶ——」

SE 車の走行音。車内で聞く強風の音。
時々、対向車とすれ違う。

吉野N「今年の春、私は、三十五年間の教師
生活に別れを告げた」

佐知「一雨きそうね。しかも、相変わらずの
すごい風。車ごとひっくり返されそうだ
わ」

吉野「襟裳は風の通り道だからなあ」

佐知「風の通る町・・・そういうと、ロマン
チックに聞こえますね」

吉野「そうだな」

吉野N「あれから三ヶ月、覚悟はしていたも
のの、妙な虚無感が心を通り過ぎる。こ
の風のように・・・そんな時だった。フ
ウという少年に出会ったのは——」

佐知「(慌てたように) ねえ。お父さん」

吉野「なんだ？」

佐知「ちよっと、止まって！」

SE 車、急ブレーキで止まる。

吉野「どうした？」

佐知「男の子が立ってた」

吉野「男の子？」

佐知「ええ。岸壁の近くに」

吉野「どんな様子だった？」

佐知「・・・何か、身を乗り出している感じ
がしたの」

吉野「どこだ？」

佐知「あつ、お父さん、あれあれ」

吉野「本当だ・・・」

佐知「何か心配だわ」

吉野「ああ・・・ちよっと、行ってくる」

SE 車のドアが開く。突風が車内に。

吉野「今日は一段と風が強いな」

佐知「ひとりで大丈夫？」

吉野「ああ。任せなさい。だてに、教師をや
ってきたわけじゃないからね」

吉野N「私は、まだ、教師という職業に未練
があった」

SE 車のドアがボタンと閉まる。
風の合間に、吉野の足音がかすか
に聞こえる。

フウム「さあ、飛ぶんだ。あの夕日目をかけて
飛ぶんだ！」

SE 遠くに聞こえるカモメの鳴き声。

フウム「あの鳥のように・・・」

SE 叩きつける荒波の音。

フウム「あの日のように・・・」

SE 近づいてくる吉野の足音。

吉野「ここからの景色は、きれいだろう？」

フウム「(驚いて) えっ?・・・はい」

吉野「この辺の子じゃないね」

フウム「・・・はい」

吉野「内地から来たのかな？」

フウム「内地？」

吉野「(苦笑して) ああ、本州のことだよ」

フウム「・・・どうして、わかるんですか？」

吉野「妙に薄着だから」

フウム「(ふっと笑って) そうか」

吉野「それに都会の香りがする」

フウム「・・・名探偵だ」

吉野「当たったようだね」

フウム「東京から来ました」

吉野「こっちの夕方は、まだまだ寒いだろ
う?手をかしてごらん」

フウム「えっ?」

SE 吉野、両手でフウの手を擦る。

吉野「ほら、手がこんなに、しゃっこく（冷たく）なって」

フウ「（ぼつりと）しわしわの手だ・・・」

吉野「えっ？」

フウ「いいえ」

吉野「私は、ここから一時間ちよつと行った所に住んでいるんだが、もしよかつたら、来ないかい？とても、いい町だよ」

フウ「でも・・・」

吉野「もうすぐ日が暮れるし、雨も降り出し

そうだ。だから、遠慮しないで」

フウ「・・・はい」

S E 車のドアが開く音。

佐知「ああ、お父さん」

吉野「東京から、来たそうだよ」

佐知「まあ、寒かったでしょう。どうぞ」

フウ「失礼します・・・」

S E 車のドアが閉まる音。

車、走り出す。

風は吹き続けている。

吉野「私は吉野と言うんだ。で、妻の佐知。

君の名前は、何て言うのかな？」

フウ「フウです」

佐知「フウって、風って書くの？」

フウ「風に鳥の鵜です。鵜飼いの鵜」

吉野「しやれた名前だね」

佐知「素敵ね。風にはばたく鳥のイメージ」

フウ「僕、空を飛べるんです」

吉野「えっ？」

フウ「飛んだことがあります——」

S E 鍋のグツグツという音。

フウ「おいしい！」

正治「だべ？保田家特製の鍋はちよつとした

自慢なんだわ。この町の名産、昆布のダ

シがきいてるしよ」

フウ「はい。こんなにおいしいの、はじめて

です・・・（ぼつりと）こんなに温かい

ご飯も・・・」

吉野「心も体も温まりますね」

元治「中に入っている魚、今日、俺らが捕っ

てきたやつだから」

フウ「そうなんですか？」

吉野「正治さんと元治さんは、親子で漁をさ

れているんだよ」

フウ「漁師さんかあ。じゃあ、船の操縦もす

るんですか？」

正治「当たり前だべさ。よかつたら、今度、

船に乗ってみるか？」

フウ「（うれしそうに）いいんですか？」

正治「ああ。その代わり、船酔いしても知ら

ないからな」

フウ「はい。お願いします。楽しみだなあ」

元治「漁の仕方も教えてやるから」

フウ「本当ですか？」

元治「ああ」

正治「（叫んで）母ちゃんたちも、早くこっ

ち来いやー」

離れた台所から聡子たちの声がする。

聡子・佐知「はい」

S E まな板で漬け物を切る音。

佐知、聡子、ひそひそ話。

聡子「まさか自殺？」

佐知「最初に見た時は、私もそう思ってた

んですけど・・・話してみると、悲壮

感がないというか、意外に明るい子で」

聡子「確かに、都会の子にしたら、無邪気な

感じがするわ」

佐知「さつきも、小さい頃に、空を飛んだこ

とがあるって、真面目な顔で言うんで

す」

聡子「空を飛んだ？」

佐知「ええ。うれしそうに話してくれまし

た」

×

×

×

フウ「（弾んだ声で）五歳くらいの時、ベラ

ンダから空を見てたんです。そうしたら、

心地いい風が吹いてきて、体がふわっと

持ち上がったんです。次の瞬間、空を飛

んでました。もの凄く気持ちよかつ

た・・・」

× × ×

聡子「飛べるわけないしょ」

佐知「(苦笑して) ええ。まあ・・・でも、

瞳を輝かせて、夢のような話ができるん

だから、とりあえず大丈夫かなあつて、

主人と話してたんです」

聡子「相変わらず、のんびりしてるねえ。吉

野先生も、佐知さんも」

佐知「すみません」

聡子「それがいい所なんだけど。でも、こん

な時期に、あれくらいの子が、ひとりで、

こんな田舎にいてっていうのは——」

佐知「多分、家出でしょうね・・・保田さん

のご家族と一緒に、食事ができてよかつ

たです。フウくん、さつきから、楽しそ

うですもの」

聡子「こっちこそ。私たちも、離れて暮らし

ている孫が遊びに来たみたいで、とつて

もうれしいんだわ。お父ちゃんも、元治

も、久しぶりに、はしゃいでるしょ」

佐知「ええ・・・ありがとうございます。こ

んな温かい雰囲気で、フウくん、いい気

分転換に、なってくれればいいんですけど

ど」

SE 静寂の中に古い時計の音。

佐知「疲れたんでしようね。ぐっすり寝てい

ますよフウくん」

吉野「ああ」

佐知「十七歳って、言ってみましたよね」

吉野「多分、高校生だろう」

佐知「ご家族、心配してますよね・・・」

吉野「当然、そうだな」

佐知「・・・フウくんのリュック、勝手に見

たら、まずいでしょうか」

吉野「うーん」

SE リュックのファスナーを開ける音。

佐知「身元を示すようなものって、ないです

ね。携帯電話もないみたいです」

吉野「何か、こういうのって、イヤな気分だ

な。持ち物検査みたいだ」

佐知「仕方ありませんよ。前途ある若者を放

つておけません・・・これって、ノート

ですよ」

SE ノートをパラパラとめくる音。

佐知「えっ？」

吉野「何て書いてあるんだ？」

佐知「・・・僕は、いったい誰ですか？」

吉野「はあ？」

佐知「答えは、風の中・・・僕は風に乗って

飛ぶ。もう一度、飛んでみせる・・・」

吉野「これは・・・」

吉野N「フウは、この土地へ飛ぶために、や

つてきたのだ」

SE 『ソーラン節』が流れている。

体育館に響く、数十人のステップ。

掛け声。鳴子の音。太鼓の音。

吉野「来週、『よさこいソーランまつり』と

いうのが札幌であるんだ。北海道内の各

市町村から、たくさんチームが参加す

るんだよ」

フウ「なんか、テレビで見たことあります」

吉野「そうか。知名度も上がってきたからね。

ここ数年は、日本各地、外国からも参加

があつて、三百以上のチームが踊りを披

露するんだよ。最終日、優れたチームに

は大賞が贈られる」

正治「うちの町は、全部女衆のチームなんだ

けど、第一回から出場してるから、結構、

有名なんだわ。(笑いながら) 平均年齢

が高いって」

元治「ほら、うちの母ちゃん、吉野先生とこ

ろの奥さんも、高校生に負けないくらい

上手に踊ってるっしょ？」

フウ「はい。すごい迫力で驚きました」

正治「あの素朴なオバちゃんチームは、われ

ら漁師町の誇りであり、シンボルなん

だ」

SE 「ヤア」という締め掛け声で、

曲が終了。

女1「はい。少し、休憩しまーす」

SE バタバタと散らばる足音。

皆、息が切れ、ハアハアしている。

女子高生1「あの男の子、かっこいいよね」

女子高生2「やっぱり、そう思った？」

女2「吉野先生の所に、遊びに来てっているんだって。東京の高校生らしいよ」

女1「どおりであか抜けてるわ」

女2「話しかけてみればいっしょ。年も同じくらいだし」

女子高生1「えーっ、やだー、はずかしい」

女子高生2「きゃー、こつち、見たかも」

佐知、聡子も、息を切らしながらの会話。

聡子「じゃあ、あの子、やっぱり、あの崖から、飛ぼうとしたのかい？」

佐知「多分・・・風に乗って、飛ぼうと思っ
てたみたいです。だから、強風で有名な
襟裳岬に・・・」

聡子「死んじやうしよ。飛んだら。岩に激突
するか、たとえ、海に落ちたとしても、
あの急な流れじゃ」

佐知「ええ。そういうことが予測できている
のか分からないんです。だか、目を離さ
ないようにしようって・・・」

吉野N「フウは、なぜ飛ぶことにこだわって
いるのか。幼い頃のあの話と何か関係が

あるのか。私たち夫婦は、理解できない
でいた」

女1「はい。もう一回、通しでやりまーす」

SE 集合する足音。

『ソーラン節』が流れる。

体育館に響く、数十人のステップ。
掛け声。鳴子の音。太鼓の音。

正治「男衆は荒海に出て漁をする。女衆は、
それを陰で支え、昆布を干す」

元治「そんな母ちゃんたちに、感謝している
から、俺ら男たちは『よさこいソーラ
ン』を応援するんだわ」

正治「『よさこいソーラン』が終わるまでは、
家のこと、なんもしなくても、男衆は誰
ひとり文句言わない」

吉野「町の女性たちも、さういう心遣いに感
謝しているんだよ。家族、町全体の人々
が、ふれあい、協力しあうからこそ、あ
んなにいい踊りができると思わないか
い？」

フウ「・・・はい」

吉野N「フウは、懐かしそうな瞳をして、踊
りを見つめていた。フウには親がいるは
ずだ。友達もいるはずだ。私たちの話は、
少しでも、それを彷彿とさせただろう
か？」

SE 車のエンジン音。

佐知「じゃあ、いってきますね」

吉野「気をつけてな」

フウ「がんばって下さい」

佐知「ありがとう。フウくん！」

聡子「おばちゃんたちの踊り、しつかり見て
てよ！」

フウ「はい」

吉野N「佐知たちは、『よさこいソーランま
つり』に出場するため、札幌へ向かった。
私は、テレビの録画を任されているため、
同行せず、フウと町に残っていた」

SE 電話のプッシュ音。

吉野N「私は、何とかしたいという思いから、
東京に住む友人に電話をかけた。フウの
事情を話し、あることを依頼した」

吉野「そういつたわけで、突然ですまないが
そっちの新聞記事を、至急、調べてもら
いたいんだ」

友人「わかったよ。数日、待ってくれるか」

吉野「ああ。忙しい中、本当にすまない」

SE 森の中。木々のざわめき。鳥の声。
清流の流れる音。

吉野「ここの森は美しいだろう？」

フウ「はい」

吉野「時として、この静かで心癒してくれる、豊かな大自然が、私たちに牙をむく時がある。この町も、ここ数年。大雨、水害、地震と天災がつづいたんだ」

フウ「そうだったんですか」

吉野「三年前の大雨で、土砂崩れがおきて・・・元治さんの奥さんと娘さんが、亡くなったんだよ」

フウ「えっ？」

吉野「仲のいい、三世代、五大家族だった」

フウ「そんな・・・」

吉野「きつと、フウくんにお孫さんやお子さんの姿を見ていたと思うよ」

フウ「(ぼつりと) だから、あんなに喜んで迎えてくれたんだ・・・」

吉野「保田さんの所だけじゃないんだ。他にも水害で家族を失った人がいる。田畑の作物や家畜が流され、離農を余儀なくされた人もいる。住む家を失った人もいる」

フウ「みんな、明るいから、そんなことがあつたなんて思いもしませんでした・・・」

SE 川の流れる音が大きく響く。

吉野「誰もが、肩を落として、しょんぼりと

なつてしまった。だから『ソーラン節』を踊るんだよ・・・自然が再生していくのと同じように、人々には、立ち直ろうとする強い力がある」

フウ「立ち直ろうとする強い力・・・」

吉野「ああ。だから、町が平和でありますように。皆が無事に一生を過ごせますように。そう祈りながら踊るんだ」

フウ「祈りながら・・・」

吉野「ここの豊かな自然と恵に、感謝して踊るんだ」

フウ「感謝して・・・」

SE 森の中。木々のざわめき。鳥の声。清流の流れる音。

吉野「豊かな森は、海とも関係があるんだよ。森の木々が魚を育てているつて、知っているかい？」

フウ「えっ？森と魚つて、関係あるんですか？」

吉野「ああ。魚は何を食べるか。学校で習つただろう？」

フウ「プランクトン、ですよ」

吉野「そう。じゃあ、プランクトンは、何を食べるか、知っているかい？」

フウ「えっ？何だろう・・・」

吉野「森の養分や土壌が生み出す養分だよ」

フウ「養分ですか？」

吉野「そう。川を伝わって海に流れ込むんだ。

だから、ここみたいに豊かな森がないと、プランクトンはいなくなってしまう。つまり、魚は生きていけないんだ」

フウ「そんなこと、考えたこともありませんでした・・・」

吉野N「森の木々を見渡し、川のせせらぎに耳を傾けるフウの瞳は、きらきら輝いていた。フウ、君はまだ、風に乗って飛びたいかい？」

SE テレビから流れる『よさこいソーランまつり』の実況。

フウ「あつ、保田さんのおばさん」

吉野「本当だ。ちゃんと録画できてるよね」

フウ「大丈夫みたいです」

吉野「実は札幌で働いている娘と、函館に嫁いだ娘も出場してるんだよ」

フウ「『よさこいソーラン』一家なんですよ」

吉野「(笑つて) 踊れないのは私だけでね」

吉野N「フウは、すっかりうち解け、まるで家族の一員のようにそこにいた・・・そして、『よさこいソーランまつり』の最終日。大通メイン会場のステージ上では、奇跡がおきていた」

SE テレビから、歓声が響く。

吉野「信じられない・・・大賞だよ。大賞！
我が町が大賞をとるなんて。すごいよ。
すごいことだよ。フウくん。奇跡だ！」

フウ「奇跡・・・よかったですね。おめでと
うございます」

吉野「ありがとう。フウくんが応援してくれ
たからだよ。フウくんが奇跡を運んでき
たのかもしれないな」

フウ「僕が？」

吉野「ああ。そうだよ。きっと、そうに違
いないよ」

吉野N「私は、我が町の快挙に、有頂天にな
っていた・・・そして、その日の夜遅く、
佐知たちが帰ってきた」

正治「よくやった。よくやった」

聡子「夢みたいだわ」

元治「すごいことだ」

吉野「おめでとう」

佐知「本当に、信じられないわ」

吉野N「皆、興奮していた。すぐにでも祝杯
をあげたい気分だったが、夜も遅かった
ため、祝杯は翌日ということと解散とな
った。私も佐知も、心地よい疲労に押し
さ、あつという間に眠りについた」

吉野N「翌朝、私たちが目覚めた時、フウの
姿が消えていた」

吉野「心当たりを探してくるよ」

佐知「どこに行ったのかしら。荷物も置いた
まま。心配だわ」

SE 電話の音。

佐知「(慌てて) はい。吉野で——」

SE 受話器からピーという合図音。

吉野「どうした？」

佐知「ファックスだわ」

SE ファックス切り替えプッシュ音。
ファックス用紙が出る音。

佐知「新聞記事が、出てきてるんだけど」

吉野「ああ。東京の友人からだよ。しらべて
もらっていたんだ・・・十数年前のを」

佐知「十数年前？」

吉野「ああ。フウくんが五歳くらいの時の
を」

佐知「それって・・・」
吉野「ああ」

SE ファックス終了音。用紙を破る音。

佐知「あなた・・・この記事、見て！」
吉野「・・・五歳幼児、マンション八階から
転落。奇跡的に無傷。当時、最大瞬間風
速二十五メートルを記録しており・・・
フウくんの話、やっぱり、本当だったん
だ」

SE 強風が吹いている。

フウM「風に乗って、もう一度、飛びたい」

SE 近づいてくる吉野の足音。

吉野「我が町の奇跡に触発されたかい？」

フウ「(驚いて) えっ？・・・先生・・・」

吉野「もう一度、奇跡を起こしたかったのか
い？」

フウ「どうして、それを・・・」

吉野「幼い頃、風に乗って飛んだように」

フウ「まいったな・・・先生は、真正正銘の
名探偵だ」

吉野「やっぱり、そうだったのか」

フウ「はい・・・いや、違います・・・」

吉野「えっ？」
フウ「・・・きっと、墜落を願っていたんだ
と思います」

SE 叩きつける波の音。

間

吉野「・・・風に乘せて飛ばすのは、今、君を支配している悲しみのほうだね」

フウ「えっ？」

吉野「さあ、思い切り飛ばすんだ。風の彼方に」

SE 風が泣いている。

フウ「・・・ある日、僕が消えてしまったんです」

吉野「消えた？」

フウ「ずっと優等生をやってきました。何も疑問を持たなかったし、周りからは褒められて、それが当たり前でした。親の望む進学校に合格できたのに、すぐに学校に行けなくなりまして・・・結局、今年の春、退学して・・・その時からです。自分が消えてしまったのは」

吉野「(やさしく) そうか・・・」

フウ「親の視界から、僕は消えてしまいました。友達の間からも消えました。その程度の存在でしかなかったんです。特定の社会、集団から離れたとたん、僕は何者でもなくなってしまうました。もう、自分が誰なのかわからない・・・」

吉野「(諭すように) そうだったのか」

フウ「だから、きつと、自分は人とは違う。すごい人間なんだと思いたかった。再確認させたかった。誰かに見つけて欲しかった・・・最終的に『奇跡』にすぎりつ

くしかなかったんです。バカみたいですよね」

SE 波が岸壁に打ちつける。

吉野「・・・私も同じだよ。『先生』という肩書きにすぎりついていた」

フウ「えっ？」

吉野「この町は最後の赴任地でね・・・ここに在る間は職を辞めても、みんな『先生』と呼ばれてくれる・・・でも、他の土地へ行ったら、どうなんだろう？・・・会う人、会う人に、「元教師です」って、いちいち言つて歩きそうな気がする」

フウ「(ぼつりと) そうかな」

吉野「そうだよ。偉そうにしてるけど、私も所詮、弱い人間なんだよ。社会的地位を主張しないと自信がない。みんな、そうなんじゃないかな。自分はこうだ！って自信のある人間なんていないよ」

SE 風が吹き付ける。

フウ「・・・僕が見えますか？」

吉野「ああ、見えるとも。この町の人々は、フウという少年の姿を、誰ひとり忘れないよ。都会からやってきた少年を・・・」

吉野N「フウの瞳に涙が光った——」

フウ「先生は、やっぱり『先生』だ・・・」

吉野「今は、老いぼれた、名探偵だよ」

フウ「(ふつと笑う) そうでした・・・ありがたうございます・・・僕、もう飛ばうなんて思いません」

吉野「ああ」

SE 風の音がする。

吉野「誰にだって、飛びたくなる時がある。それは、良い意味でも、悪い意味でもね」

SE カモメの鳴き音がする。

吉野「その時、何を思うかだよ」

SE 激しく打ち寄せる波。

吉野「この町の風景であって欲しい・・・潮の香り。打ち寄せる波。漁船の群れ。海に落ちていく夕日。吹きすさぶ風。森のざわめき。滝を有する清流」

フウ「はい・・・」

吉野「『ソーラン節』と踊りであって欲しい・・・人々の笑顔。声援と歓声。飛び散る汗。躍動。そして、平和への祈り。自然の恵みへの感謝」

フウ「はい・・・」

吉野「私も、自分を見失ったら、思い出すことにするよ。二人の約束にしよう」

フウ「はい・・・約束します」

吉野「いつでも、この町に来るといい。悲しみを飛ばしに・・・消えてしまいたいそうになつたら、来るといい。みんな、君のことを覚えてるから・・・」

フウ「(覇気のある) はい！」

吉野「いい笑顔だ」

フウ「この町に来てよかった・・・吉野先生に、皆さんに会えてよかった・・・僕を見つけてくれて、ありがとうございますました」

吉野「私の方もだよ。見つけてくれて、ありがとうございます。フウくん・・・」

吉野N「翌日、フウは帰っていった。お土産に昆布をたくさん持って・・・突然、風のようにやってきた少年・・・きつと、救われたのは私の方だったのだ」

SE 何艘もの漁船が、エンジン音を響かせ出ていく。

吉野N「『よさこいソーランまつり』の大賞受賞に沸いた町は、余韻に浸る間もなく、昆布漁で忙しくなった。男たちは荒海に船を出し、女たちはもくもくと昆布を干している」

SE

『ソーラン節』が流れている。
体育館に響く、数十人のステップ。
掛け声。鳴子の音。太鼓の音。

おわり